

●社会を明るくする運動作文コンテスト

祖父の働く姿に見た 命の重さを綴る

内野匠さんが最優秀賞の法務大臣賞を受賞

法務省が主催する「第58回社会を明るくする運動」作文コンテストで、栃尾小6年の内野匠さん（奥飛驒温泉郷中尾）が最優秀賞の法務大臣賞を受賞しました。

このコンテストは、小中学生に日常の家庭生活や学校生活などで体験したことをもとにして、犯罪や



土野市長に受賞報告する内野さん(中)と益田栃尾小校長(右)

非行に関して考えたことや感じたことを作文として募集するもの。今回は全国から応募のあった約17万5千点の中から選出されました。

「心の救助隊」と題した内野さんの作品は、今年結成50周年を迎える北飛山岳救助隊の隊長を務めていた祖父・政光さんの命懸けの救助活動の姿から、命の重さを綴ったもの。

受賞の報告に土野市長を訪れた内野さんは、山岳救助の仕事に「昼夜を問わず大変な仕事」と評し、「誰よりもじいちゃんが喜んでくれて、すごくうれいす」とはにかみながら話しました。

問合せ先

福祉課

☎35-3139

心の救助隊

栃尾小学校6年 内野 匠

「チェーンソーをもって、ヘリポートまで来てくれ」

一本の電話がかかってきて、じいちゃんには身じたくをしました。チェーンソーを持ち、くつにアイゼンをつけて、救助用のヘルメットをかぶりしました。

ぼくのじいちゃんは、北飛山岳救助隊の隊長でした。今でも、頼まれると、遭難者の救助の応援にかけつけます。

まだ、雪が氷となって厚く残る冬山では、チェーンソーが欠かせません。その氷を切って、スコップでどけながら、遭難者をさがすのだそうです。残念なことに、この日の救助は間にあわず、遭難した方は亡くなっていったそうです。「あそこは、よく雪崩がおきる所やで、あんな所へ行っただんでは、雪崩に巻きこまれる。なんであんな所へ行っただんだ」と、じいちゃんは、ひとり言をくり返していました。生命のあるうちに助けたかったんだと思います。そのくやしい気持ち伝わってきて、つらい気持ちになりました。

冬山で遭難した場合、ヘリコプターは視界がとざされ、危険なため使えません。だから、冬山での救助は、歩いて探すほ

かありません。その人の通ったと思われるルートをとどって、吹雪の中を30人も救助隊が、歩き回って探すのです。

ぼくには、自分が危険をおかしてまで、人を助けに行こうとする気持ち、正直言って分かりません。家族が遭難しているのならともかく、そこにいるのは、まったく見ず知らずの人なのです。じいちゃんに、「なんでそこまでして助けるの」と聞いたら、「地元の山に登りに来た人が遭難したら、地元救助隊ですぐにかけつける、それが地元の誇り。知らん顔はしておれん」と言いながら、一枚のメモを見せてくれました。

『月曜から遭難して、今日は水曜。お母さん、ごめんさい…。助かるようがんばるけど、雨と寒さがとてもつらい。今日は元気だけど、この先わからない…。もしもの時は、お母さん、今までありがとう。あなたの息子でよかった』だから：だから一刻でも早く、救助に向かわなければならぬと、じいちゃんは言いました。

このメモを残した方は、遭難から9日目に北アルプス外ヶ谷で発見されました



祖父の政光さん(右)と匠さん